

第V章 考 察

1 屋 瓦

A 軒瓦の組み合わせ

平城宮跡で出土した瓦のうち軒瓦の総個体数は、1975年現在で24,000点をこえており、軒丸瓦・軒平瓦のそれぞれに100以上の型式がみとめられている。これらの軒瓦諸型式は、すべてが一様にみられるのではなく、十数型式のみが集中的に多量に出土している。宮内の地域によって、瓦の出土量には多寡があり、また出土する軒瓦型式に差異のあることも知られている。さらに、特定の軒丸瓦型式・軒平瓦型式が一組として製作・使用されたことも判明している。

平城宮の代表的な軒瓦

主な組み合わせ10組のうち宮内のほとんど全調査地域に広くみられ、かつ出土量も多いのは、

* 6311A・B—6664D・F, 6225—6663, 6282—6721であって、平城宮の造営・改修に際してこの3組が最も多くもちいられた瓦ということができる。ところで宮内における軒瓦の組み合わせのありかた(Tab. 22)を比較するとき、今回報告する内裏北外郭地域において最も数多くみいだした6311A・B—6664D・Fが、内裏地域においても多数を占め、ともにあい近い比率をしめしていることが注目される。つぎに多いのは、6313・6314—6666・6685の組である。内裏内郭地域では6314をみないが、6313が6666・6685の両者と組みあっており、個体数・比率ともにやはり6311—6664の組について第2位をしめしている。内裏北外郭地域出土瓦の第3位を占めるのは、6225—6663の組みである。この組みは、内裏地域においては出土瓦の1割未満で、第4位となっているが、いっぽう内裏地域で第3位を占める6282—6721の組みが、内裏北外郭地域では第4位となっている。以上かかげた4組の軒瓦のうち、6311—6664, 6313・(6314)—6666・6685の2組が、内裏北外郭・内裏の両地域に共通して軒瓦のなかでともに第1・2位を占め、かつそれぞれ全体の50%という多数を擁する事実は重要である。それは両地域の建物が同一の造営計画にもとづき、同時もしくは時を接して造営された可能性をしめすからであり、かつまた、北外郭の性格が内裏と密接なものだったことを想定させるからである。

主要軒瓦は内裏と共通

ここで、内裏東外郭地域、および大膳職地域における軒瓦型式の比率と比較してみよう。

* まず、内裏東外郭地域においては、6311—6664が最も多く、6225—6663の組みが2位を占める。この両者にくらべるとずっとすくないが、第3・4位は、6313・6314—6666・6685, 6282—6721の2組である。内裏北外郭・東外郭両地域の軒瓦とくらべると、第2・3位の順がいかかわってはいるが、似た構成ということができ、造営期が同時であった可能性を考えさせる。

造営期が同時の可能性

つぎに、大膳職地域の軒瓦で第1～3位を占めるのは、6282—6721, 6133—6732, 6284—6664の組であって、今回報告する内裏北外郭の軒瓦の構成とは異っている。これは、両地域の建物群が性格を異にし、かつ造営年代がちがっていたことによるものであろう。

B 軒瓦の製作年代

軒瓦年代
観の修正

平城宮においては、内裏・朝堂院がまず中央に(第1次)、のちに東寄りに(第2次)いとなまれたことをさきに推定し、「第2次内裏」造営の時期としては、聖武天皇が還都した天平末年以降の可能性が大きいと考え、6311A・B—6664D・F、6313・(6314)—6666・6685に、天平末年の年代をあたえた¹⁾。しかし先述したように、今回、この2組の軒瓦は、SK2102における出土状況から、^D 確実には神亀末年にまで、おそらく養老ころまでさかのぼることが明らかになり、したがって、第2次内裏の造営年代は下っても天平元年までであると考えるにいたった。SK2102から出土した木簡には、造営関係の記載をもつものが多い。上記2組の軒瓦は、内裏の造営とあい前後して、内裏北外郭が最も整備された時期に使用されたものであろう。

藤原宮式瓦

ここで、平城宮の軒瓦のうち、主要なものについて、現状における年代をかがけておこう。
6273・6281—6641・6643をはじめとする藤原宮式の軒瓦は、平城宮においては、藤原宮における組み合わせそのままではなく、対応関係もくずれて用いられている。しかし、朱雀門・宮城西南隅付近で出土した軒瓦のなかで、藤原宮式の占める割合が大きい事実は、和銅年間、平城宮の最初の造営にあたって使用したことをしめすものであろう。

興福寺式瓦

6301—6671 は、興福寺創建(和銅初年)に際してもちいた組み合わせである。しかし、平城宮で出土するのは6301B・Cであって興福寺で使用した6301Aそのものは出土していない。型式学的にみて、6301B・Cは、6301Aと近接した時期を想定させ、造興福寺仏殿司(養老4年設置)との関連で養老年間にさかのぼるもの²⁾と考える。6284C—6664Cの組み合わせも、また和銅の瓦と考えられる。6664の14種には、中心飾りの花頭の形状にi~iiiのヴァリエティがあることを先にのべた(Fig.28)。6664Cの花頭はこのうちiにぞくし、茎部上端は左右にひらき、かつ内区・上外区とを画する界線に接していない点で、均整唐草文をもつ最古の軒平瓦、すなわち

	宮城西方 官衙地域	朱雀門・ 宮西南隅	第1次朝 堂院地域	第1次 内裏地域	大膳職 地域	内裏北 外郭地域	第2次 内裏地域	第2次朝 堂院地域	博積基 壇建物	造酒司 地域	東院地域	
I期		6273 6281	6284A~C									和銅元 708
II期		6301B・C * 6671B・C	6641 6643	6664C		6311A・B 6304A~C 6664D・F	6225 A~C	6135 A・B*	6012 6658 A~C	6572		養老5 721
III期				6133A~D 6732A~C		6313A~D 6314A~D 6666A 6685A~D						天平17 745
IV期				6282 B~I 6721 A・C~H					6282 B~I 6721 A・C~H			749~756 天平勝宝
										6151 6760		天平宝字 757 767~769 神護景雲

Tab. 21 平城宮主要軒瓦の編年

*はその組の軒瓦がその地域の出土軒瓦のうち数量的にそう多くないもの

1) 『平城宮報告Ⅲ』p. 67。

2) 『平城宮報告Ⅵ』p. 140。この問題にかんしては、森 郁夫「平城京における宮の瓦と寺の瓦」『古代研究』第8号1976年 pp. 3を参照。

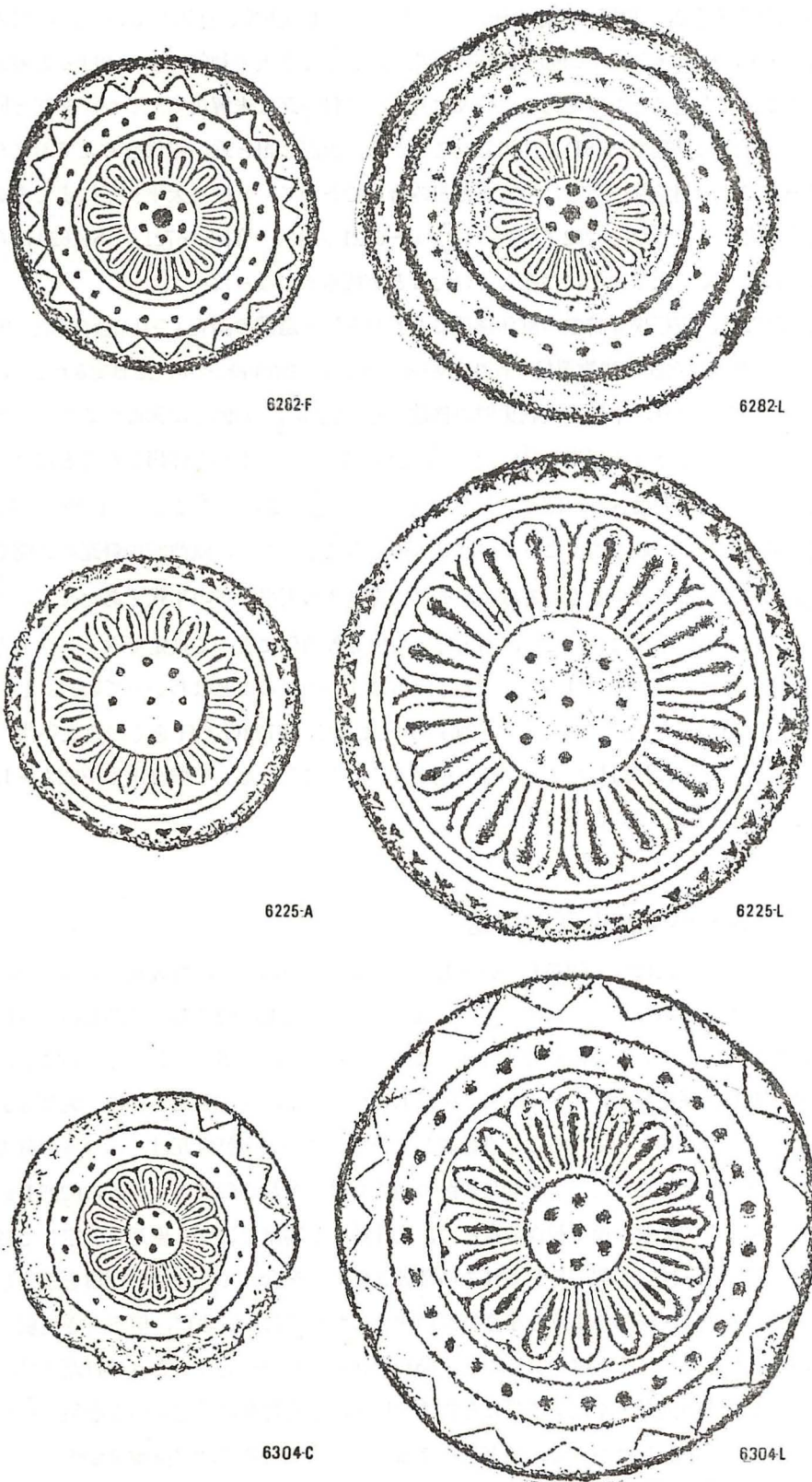


Fig. 48 普通の軒丸瓦と大型軒丸瓦 縮尺 1/4

6661 (大官大寺式) のそれに直結し, iii, すなわち基部が平行 2 直線からなり, 茎部上端が上の界線に接しているもの (6664D・F) に, 型式学的に先行している。6284C—6664C は, 6A

BE区SD3765下層で、和銅の年紀木簡、および平城宮Ⅰの土器と伴出している。6311A・B—6664D・F、6313・6314—6666・6685の年代が、おそくも天平初年にさかのぼると考えるにいたったことは先述のとおりである。6308に対応する軒平瓦は未解決であるが、6685と同文様の6682が奈良山52号窯で6308Dと伴出したことから、上記2組と近い年代を考慮しておきたい。

朝堂院の瓦 6225—6663は、朝堂院の造営にもちいた組み合わせであって、やはり天平初年にまでさかのぼる可能性が大きくなった。6282（A種をのぞく）—6721の組は、今回、6721がSK820から出土したことによって、天平末年に存在していたことが明らかになった。

6012—6572は、唐招提寺講堂の解体修理にともなう地下遺構の調査（奈良県教育委員会1972年）によって、講堂創立前の建物遺構（新田部親王〈天平7年=735年没〉の旧宅と推定される）に伴うことがあきらかとなり、平城宮東朝集殿の移建（天平宝字3年=759年）に先だつことが判明したが、ひきつづいてやはり唐招提寺講堂地下で、天平15年の紀年木簡と伴出したことによって、年代はさらに天平年間にさかのぼることが確実となった³⁾。このようにして、6012—6572を重

重圀文軒瓦の年代

圀文瓦の組みとして、最も古くにさかのぼるものとする。なお、難波宮の軒瓦の研究では、6015—6572がこれに先行するものと考え、それに神亀3—天平6年の年代をあたえている⁴⁾。

6133—6732の製作年代については、西大寺・東大寺の類例によって推定できる。西大寺西塔跡の発掘調査によって、6732Hがおそくとも宝亀にさかのぼることはわかっていた。しかし、

東大寺西塔跡の軒平瓦

東大寺西塔跡の調査（奈良県教育委員会、1965年）によって、6732G・Hをその建立年代、すなわち、天平勝宝5年に使用したことが確認できるようになった⁵⁾。平城宮出土6732A～Dの年代も天平勝宝年間におくことが可能である。

C 大型・小型軒丸瓦の用途

今回報告する軒丸瓦には、6225L、6304Lのように、径がふつうの軒丸瓦の倍に近い、ひじょうに大きなものがある。平城宮には、このほかにも、6282L、6308L、6133Lのように同様に大型の軒丸瓦がある。この種の大型軒丸瓦に共通する特徴は、出土量がすくないこと、これに対応する大型軒平瓦がないことである。6225Lについては、先述したように、丸瓦部がふつうの大きさの丸瓦からなっていることを確認している。この大型軒丸瓦は、ふつうの軒先・蟻羽にもちいたとは考えられない。東朝集殿跡の調査では、多数の6225Aとともに6225Lが8個出土しており、東朝集殿の模型製作の際には、大棟飾りが鴉尾ではなく鬼瓦と仮定して6225Lを大棟に2個、降り棟に4個、そして拝みの部分と軒隅とを含めて計12個の使用を想定した⁶⁾。

朝堂院跡の大型軒丸瓦

6313・6314・6666・6685のような小型軒瓦の用途については、さきに、檜皮葺き屋根の棟瓦か築地の屋根瓦の可能性をあげた。しかし、6311—6664など一般的な大きさの軒瓦には、これに対応するふつうの丸瓦・平瓦が多量に存在する反面、小型軒瓦に対応すべき小型丸・平瓦は、ほとんど存在しない。したがって、棟瓦と考えるのが妥当であろう（別表4解説参照）。

小型軒丸瓦は棟瓦

3) 奈良県教育委員会『国宝唐招提寺講堂他二棟修理工事報告書』1972年、p.62。

4) 中尾芳治「重圀文軒瓦の製作年代と系譜についての覚書」『難波宮研究調査年報』1971年。

5) 奈良県教育委員会『重要文化財東大寺中門廻

廊修理工事報告書』1961年、p.47。奈良県教育委員会『東大寺西塔院の緊急調査』奈良県文化財調査報告書8、1965年、p.20。

6) 細見啓三「平城宮東朝集殿の復原模型」『年報1970』、p.47。